

## くらしと協同をたずねて

### キセキノメイシ

### —「知的障害児」の能力が語るもの—

久保 ゆりえ (明治大学商学部兼任講師)

#### 1. はじめに

本稿で紹介するのは知的障がいのある子どもたちが書く文字を使った名刺作成サービスである。これだけ聞くと、人によっては「知的障害児が書く文字って読めるの?」と思うようだ。しかし実際には、知的障がいがあるからと言ってバランスのとれた文字が書けないとは限らない。むしろ、非常に丁寧な文字を書くことのできる人もいるのだ。反対に、どんなに知能指数が高くて優秀な大学を出ていようが、読めないような字を書く人もいるだろう。

人々がもつ能力に関する思い込み。これが、「私たちに出来る仕事」の幅をどれだけ狭めてきただろうか。私たちは、他者がどのような能力をもっているかを知らない。もっと言えば、自分自身も持っている能力すらわかっていないこともある。もし私たちが、私たちそれぞれがもつ本当の能力を知ったとしたら、どんな新しい仕事が生まれるだろうか。

#### 2. キセキノメイシとは

##### 2-1. 概要

キセキノメイシは、ザクセスコンサルティング株式会社 (以下、ザクセス) という営業コンサルティング会社による名刺作成サービスである。名刺の文字を書くのは、

知的障がいのある子ども・若者とその家族の自立支援活動をしている「一般社団法人からふる」(以下、「からふる」)のメンバーである知的障がいのある子ども・若者(以下、「からふるメンバー」)である。キセキノメイシは、この2つの組織の連携のもとで成り立っている。

顧客は、キセキノメイシの Web サイトを通じて名刺を発注する。名刺に記載する文字のうち、手書きにしたい部分を指定することができる。注文に応じて「からふるメンバー」が文字を描く。名刺に入れる文字の配置等の全体的なデザインはザクセスが担当する。名刺の価格は100枚5,000円。売上げの20%は一般社団法人からふるに還元され、団体の活動費やからふるメンバーへの謝礼になる。

##### 2-2. 事業開始のきっかけ

ザクセスの代表取締役である鬼頭秀彰さんは、キセキノメイシの生みの親である。そのアイデアは、7年ほど前に鬼頭さんと知人との雑談の中から生まれた。近年は知的障がいのある人々のイラストや絵が社会的に注目を集めているが、知的障がいのある人々が書く文字というのもまた味があって良い。字を書くということ、知的障がいのある人々の就労支援等、何かより広い社会とのつながりをもつための活動にしていくことはできないか。そこで、自身の身近にある文字を使った商業製品のうちか

ら、名刺というものに着目した。

鬼頭さんは、知的障がいのある子ども・若者の自立支援をしている一般社団法人からふるとの連携のもとで、知的障害のある子どもたちの書く文字を使った名刺作成サービスを開始することとした。Webサイトは自作することで製作費はかけず、大手Webニュースに取り上げてもらう等して広告費もゼロで事業を開始した。始めるからには少なくとも10年は続けようという覚悟があった。

### 2-3. こだわり

キセキノメイシのこだわりは、品質である。例えば、「人様の名前を書く」とはどういうことか。表札や賞状等を書く「筆耕」と呼ばれる仕事があるが、鬼頭さんは、キセキノメイシの事業開始に際して筆耕の先生のもとでそうしたことも勉強したという。そして、プロのデザイナーにも関わってもらいながら、名刺の全体的なバランス調整にも手をぬかない。もちろん、印刷も最高レベルの機種を導入している会社に発注し、品質を落とさないようにしている。「障害者のやる仕事は安い」という常識は間違っているからだ。

もう一つ。それは、キセキノメイシの文字を書く仕事は、書道等の特別な才能がなくても出来るということである。言い換え



筆者もキセキノメイシを発注してみた  
(オリジナル・イラストは別料金)

れば、からふるメンバーのありのままの能力さえあれば良い。鬼頭さんは企業家として、彼ら・彼女らのありのままの能力を活かして、顧客が「買いたい」と思うような新しい価値をもった名刺作成サービスを生み出したのである。

## 3. キセキノメイシのインパクト

### 3-1. 「ビジネスの現場」に身を置く人／置かない人

「障害者の才能を活かす」という発想を取り入れたビジネスは、近年増加している。しかしそれらは、例えば障がいのある人々が描いたものを、絵画として販売するか、もしくは雑貨・ファッション関連の商品デザインに活かすというものが多かった。キセキノメイシの独自性は、障がいのある人々の能力を、いわば「くらしの現場」で使うモノではなく、「ビジネスの現場」で使うモノに反映させたことである。

ここでふと気付かされる。多くの人々の生活において「仕事をする時間」と「それ以外の時間」というのは明らかに区別されたものである。しかも、日本の就業者人口約6,580万人のうち、雇用労働者は5,880万人。つまり、日本で働く人々のうち約9割は、誰かに雇われて働いている。とすれば、「仕事をする時間」は基本的に、誰かが決めた始業時刻から終業時刻までの間、誰かが決めた職務内容を遂行する時間だ。雇用労働者が「仕事をする時間」に自らの身を置いているのは、「ビジネスの現場」である。

「ビジネスの現場」に身を置くことができるのは、どのような人か。それは、企業が求めるに足りるだけの労働力と能力を

もった人々だけである。労働力と能力。このいずれかが欠けていれば、ほとんどの場合、「ビジネスの現場」に身を置くことはできない。それは例えば、健康な肉体があっても、コミュニケーション能力がなければ企業に雇ってもらえないという現代社会の現実に象徴されている。

後述のように、知的障がいのある人々がこの「ビジネスの現場」に身を置く、つまり一般企業で働くことは多くない。しかし知的障がいのある人々が「ビジネスの現場」で労働力を提供することができないとしても、少なくともその能力を開陳していくことは出来る。キセキノメイシはそうしたインパクトをもっている。

### 3-2. 企業に与えるインパクト

キセキノメイシの派生的なプロジェクトとして、企業のロゴマークやポスターの制作がある。からふるメンバーが、企業ロゴや事業ロゴ、そしてポスターや各種マニュアルの挿絵等を作成するのだ。これらの商業デザインは、「からふる」が知的障がいのある子ども・若者とその家族のために月1回開催しているお絵かきワークショップ「アトリエからふる」の活動の場で行なわれる。いわば「企業案件のお仕事」として、だ。

関係各位のご厚意で、「アトリエからふる」の現場取材に行くことができた。2月の第二土曜日。この日は、ある中小企業の役員・従業員の方々も来ていた。この企業は、ある新規事業立ち上げに際し「からふる」に事業ロゴの作成を依頼した。からふるメンバーが描いたたくさんのイラストは、どれも既成概念に縛られない自由さと美しさがある。事業ロゴの作成を、一般企業に外注すれば、どこかで見たことのあるようなものばかりあがってくる。この中小



アトリエからふるの風景

企業の役員が求めていたのは、自分たちとは異なる感性によって生みだされる「想像を超えるようなロゴ」であった。

「ビジネスの現場」に身を置く人々もまた、その世界の常識に囚われて閉塞感を覚えることがあるだろう。企業の組織文化を変えることは難しい。からふるメンバーが作成したロゴは、この「ビジネスの現場」の常識に風穴を開ける可能性を大いにもっている。そのロゴを使うことにより、関わる従業員たちの新規事業に対する意識はどのように変わるのか。そんなことを考えるだけでもワクワクする。

### 3-3. 大企業のロゴも自由にアレンジ

鬼頭さんたちはギャラリスト（美術商）の協力も得て、知的障がいや精神疾患をもつ作家の描いた絵の展示販売会「Art of Rough Diamonds（ダイヤモンドの原石たち）」を年1回ペースで開催している。2017年の展示会では来場者約1,200名、約60点の絵画販売が実現したという。

2015年に催した展示販売会では、日本航空、ゼブラ、花王、日清食品等の大企業のロゴを、からふるメンバーがアレンジしたものが展示された。からふるメンバーが描く大企業ロゴは、まさに私たちの企業に対するイメージを打ち破る何かがある。日本航空のあの有名な赤い鶴のロゴ。からふるメンバーの描いたものには、鶴が大きく

広げ上げた羽の先には、にっこり笑った小さな亀が描き添えられている。楽天のロゴにある「楽」の字は、象形文字のような宇宙人のような、なんとも言えず愛らしい生物のようになっている。象印のロゴにある象が伸ばす鼻の先には、リングが一つ…。いつも私たちの生活の中であって当たり前の「大企業」の存在。近いようで遠いその存在に、一気に人間味が増してくる。

今年の展示会は、なんと米国開催が決定したという。展示会は、米国ワシントンDCの日本大使館において2019年7月15日から9月30日まで開催予定だ<sup>1)</sup>。展示会に出品する絵画のテーマについては毎年異なるようであるが、筆者の個人的な希望では、ぜひ「ビジネスの現場」で使われるイメージやモノ・サービスに関わるテーマを追求してほしい。



お手本になるイメージ画像がからふるメンバーたちに企業からの依頼内容を伝える  
(これはスプリンクラーのマニュアル用)

## 4. 知的障害児の教育と仕事

### 4-1. 「からふる」とのコラボレーション

翻って、からふるメンバーならびにその家族の視点から見るとどうだろうか。文字を書くのが好き、という知的障害児の「好

きなこと」が仕事になる。持っている能力が「お金になる仕事」となることは、自信にもつながる。

「からふる」は、障がいのある子どもたちが「好きな仕事で自分らしく自活できる幸せ」をかなえるべく、障がい児の親たち3人によって立ち上げられた団体である。その理念は、「障がいのある子どもたちの『自分を生きる』を応援し、笑顔といろどりあふれる社会づくりを目指す」こと<sup>2)</sup>。鬼頭さんのアイデアは、この理念を実現する一つの道筋であった。

### 4-2. 狭められていくコミュニティ

しかしながら現実には、知的障がいのある子どもたちにとって、どのような学校に通い、どのような人々と出会うか、といった人生の選択肢は極めて限られている。とりわけ人々との出会いについて。幼少期から、保育園ではなく療育と呼ばれる「障害のある子」のための施設に通い、習い事も「障害のある子」のための教室に通い、小中学校も特別支援学校や特別支援学級といった「障害のある子」のための学校・学級に通う。小さい時からずっと同じお友達と過ごす…となれば、ただでさえ限られた地域の中で、出会える人々の幅も狭くなる。

障がいのある子どもとその家族のコミュニティは、福祉制度上の「障害がある」という基準によって規定されてしまう。さらに言えば、その狭いコミュニティの中でも、子どもの「障害」の重度／軽度や「何が出来る／出来ない」といった能力の差をもって、親同士が比較意識をもつようになる。すると、「障害」の重い子どもをもつ親同士、軽い子どもをもつ親同士といったさらに狭いコミュニティが形成されていく<sup>3)</sup>。

#### 4-3. 知的障がいのある人々の就労状況

学校を出た後はどうなるのか。ここで少し客観的なデータも確認しておきたい。文部科学省「平成 29 年度特別支援教育資料」をみてみよう。例えば特別支援学校の中学部を卒業した場合、98.8%とほぼ全員が進学する。特別支援学校の高等部を卒業した後、約 6 割は社会福祉施設等に入所・通所する。就職する人は約 3 割である。

就労状況はどうか。厚生労働省「平成 23 年度障害者の就業実態把握のための調査」<sup>4)</sup>によれば、知的障害者のうち 51.9%は収入を伴う何らかの仕事をしている。しかし、このうち常用雇用に就いている人は約 2 割に過ぎず（重度であればその割合は 5%）、常用雇用以外が多数を占める。常用雇用以外の具体的な就業形態は「就労移行支援事業、就労継続支援 B 型、授産施設等」(46.0%)と「地域活動支援センター、地域の作業所」(18.4%)が主なものである。

知的障害のある子どもたちの多くは、狭められたコミュニティの中で幼少期・少年期を過ごす。上記のデータからうかがえるのは、この時期を過ぎてもなお、障がいのある子どもたちの多くは、「障害者のための職場」という狭いコミュニティから逃れられないということである。

#### 4-4. 既存の仕事に障害者を合わせるという発想を捨てる

こうした閉塞感から脱するためには、2 つのことが必要である。1 つは、「福祉を受けている障害児とその家族」という既存のコミュニティの殻を打ち破ることである。「からふる」の立ち上げメンバーであり代表理事の萩原禎子さんは、「からふる」の活動や、そこから派生したキセキノメイシの取り組みによって、色々な人と出会え

ることが本当に嬉しいという。知的障がいのある子どもたちにもっと色々な体験を通じて、人生の選択肢を増やしてほしい。そのためには、「楽しいと思えること、笑顔になれることであれば何でも取り入れたい」、という萩原さんの言葉はとりわけ印象的である。

もう 1 つ重要なことは、「障害のある人々はこういう仕事しかできない」という思い込みを捨てることである。学校を出た後にどんな仕事ができるだろうか…知的障がいのある子ども・若者とその家族が将来のことを想像するにあたり、少ない選択肢しか浮かんでこないのは寂しいことである。キセキノメイシは、厳密な意味で知的障がいのある若者の雇用創出にはつながっていないかもしれない。しかし重要なのは、彼ら・彼女らが「仕事」というもの、ひいては自身の能力を活かしてより広い社会とつながることへの興味・関心をもつことなのである。

私たちは、既存の企業の中にある様々な職務の中から、「障害者でも出来そうな仕事」を探すことしかできないのだろうか。むしろ、障がいのあるなしにかかわらず、その子の好きなことや得意なことを「仕事として成立させていく」というクリエイティブなプロセスが必要である<sup>5)</sup>。日本には、障がいのある／なしに関わらず、育児・介護や心の病等々、様々な理由で働きたくても「自分に合いそうな仕事がない」と諦めている人々が一定数存在している。仕事に自分を合わせるのではなく、自分がやりたいことをする。こんなにシンプルなことを、どうして私たちは出来ないのだろうか。そんな問題提起を頂いたように感じる。

## 5. おわりに

萩原さんは言う。「福祉制度が生活の一部を支えてくれるからこそ、より広い社会への参加が可能になっている。しかも、企業や様々な専門家たちとは、『障害者』という線引きなしに『ハート』でつながれる。からふるの活動は、障がいのある子ども・若者とその家族たちの生活をより豊かにする『+α（プラスアルファ）』だ」と。このプラスアルファの世界を作り出すのは、当然行政の仕事ではなく私たち自身の仕事なのである。

今回の取材を通して、鬼頭さんと萩原さんと筆者という3人に共通していたのは「障害者という線引き」への疑問である。そもそも知的障害者とは誰のことを言うのか。もちろん法的に知的障害者を定義づけるものはないが、例えば厚生労働省の「知的障害児（者）基礎調査」では次のように定義される。すなわち、「知的機能の障害が発達期（おおむね18歳まで）にあらわれ、日常生活に支障が生じているため、何らかの特別の援助を必要とする状態にあるもの」である。日常生活に支障をきたしている場合には、都道府県（および政令指定都市）が発行する療育手帳を取得することで公的補助を受けることができる。この療育手帳の障害判断基準や障害の重さを示す等級は、自治体ごとに異なる。しかしおおむねIQ70～75未満であることが障害の判断基準となる。

つまり私たちは知能指数という縦の連続線上に、福祉制度運営の都合上引かれた横の線、いわば「足切りの線」のようなもの、これによって「障害のある／なし」を決めている。このことをどう考えるか。私たちは、なぜ「線引き」無くして社会を形成していくことができないのか。唯一の正しい

答えはない。この難しい課題こそが、私たちの未来をよりクリエイティブで豊かなものにしてくれる。



一般社団法人からふる代表理事・萩原禎子さん（左）とザクセスコンサルティング株式会社代表取締役・鬼頭秀彰さん（右）

### 参考文献

堀利和(2018)『障害者から「共生社会」のイマジン』社会評論社。

### 注)

- 1) 「Art of Rough Diamonds」の出品作品は、インスタグラムにもアップされている。[https://www.instagram.com/art\\_of\\_the\\_rough\\_diamonds/](https://www.instagram.com/art_of_the_rough_diamonds/)
- 2) 一般社団法人からふる Web サイトより引用。<https://color-fuls.com/about.html>（最終取得日2019年3月4日）。
- 3) 「からふる」初代代表理事・吉澤泉さんのインタビューより。<https://www.youtube.com/watch?v=5C33tkIrAOc>（最終取得日2019年3月4日）。
- 4) この調査において「就業者」とは「調査時点で賃金、給料、諸手当、内職収入などの収入を伴う仕事をした者」を指す。
- 5) これをどのように収益性のあるビジネスとして成立させていくかについては、従来のソーシャル・ビジネスに関わる研究・議論の域を出ないためここでは言及しない。ただし、鬼頭さんも強調されていたのは、顧客が商品・サービスの付加価値を「障害者がやっているから」という点にしか見出さないのであれば、それは望ましいかたちではないということである。このことがキセキノメイシの品質の追求につながる。